

鈴木 圭吾

柳沢吉保（万治元・一六五八年～正徳四・一七一四年、『土芥寇讎記』が書かれた時代の名は保明）は、五代將軍・徳川綱吉に仕え、一〇〇石そこそこの小者から甲府一五万石の領主にまで成りあがった人物である。吉保は、綱吉のもとで側用人として大きな権力を握った。そのような人物には、善悪様々な評判があるだろう。そのような、評判と吉保の実際の事跡、『土芥寇讎記』のなかの吉保の評価を比較することで、『土芥寇讎記』の編者像を探ってみたい。

柳沢吉保は、『土芥寇讎記』が書かれた時点では、和泉国大鳥二万二〇三〇石の領主であり、『土芥寇讎記』のなかでは、次のように評価されている。

保明、生得才智發明也。文武之沙汰ハナシト云ヘドモ、上ニ好マセ給フ処、御近臣ダレバ、争カ文道ヲ学ビ給ハザルベキ。行跡正シク、慈悲專ラトシテ、民ニ哀憐アリ。忠勤ヲ第一トシテ、仁心深キ故、殺生ヲ堅ク誡メラル。仍家人・百姓ニ至ル迄、物ノ命ヲ断タズ、慈悲專ラトス。心意順路ニシテ、邪佞ノ心ナク、譽之善將ト云ヘリ。

評ニ云、本文之如クバ、更ニ難ナシ。誠ニ譽之善將ト云フベシ。信アレバ徳アル故ニ、上意ニモ叶ヒ、家繁昌スト見ヘタリ。

これから、『土芥寇讎記』のなかで吉保は、本文でも、謳歌評説でも、高い評価を得ており、仁心があり、忠勤に励む善將とされていることがわかる。

しかし、吉保の評判には、必ずしもよくないものも存在している。その一つは、吉保が好色家だというものである。吉保の身边には艶

聞が絶えなかったという。室鳩巢は友人に出した手紙のなかで「柳沢吉保は漁色家で二十余人もの女性を抱えていたので、諫言したが聞きいれられず、そのため職を辞めた用人が三人もいるほどである」と書いている。また、將軍との男色関係をいうものもある⁽¹⁾。吉保の周辺には女色、男色にまつわる多くのうわさがあるのである。『土芥寇讎記』のなかで、女色、男色はマイナスの評価につながる。しかし、『土芥寇讎記』のなかでは、吉保のこのようなうわさには全く触れられていない。また、吉保の権勢が盛んになるにつれ、吉保の権勢を苦々しく思うむきもあつたようである。新井白石は、その随筆『折りたく柴の記』のなかで、吉保について「甲斐の国主となりしほどには、老中みなく其門下より出て、天下大小事、彼朝臣の心のまゝにて、老中はた彼朝臣が申す事を、外に伝えられしのみにして、御目見などいふ事も、僅に一月がほどに、五七度にも過ず」と書いている。また、浅見綱齋は、『常話雑記』のなかで、吉保が甲斐の領主になったことについて、「出羽守ノ松平姓ヲ賜リ、甲府ヲ賜ルコト、大ナル謝リゾ」と述べている。これらの評判が、事実であるとしたら、『土芥寇讎記』の記述は、吉保を非常に持ち上げた、彼にとつて有利なものだということできる。そして、『土芥寇讎記』の編者は、吉保に近い立場の者ということになるだろう。

では、吉保の実際の事績はどのようなものだったろうか。側用人としての吉保は、独裁的に権力を振るうことなく、老中合議制を重んじる誠実な人物であつたという。この点は、吉保の日記『楽只堂年録』や、『令条留』『仰出之留』などの御用部屋の記事によつて、断片的ながら伺うことができる⁽²⁾。また、吉保は側用人としての政務をこなすかたわら、藩政にも意を注いでいる。吉保は『土芥寇讎記』が書かれた直後の元禄五年（一六九二）、七万二〇三〇石に加増され、武蔵国川越の城主になっているが、川越時代には、家臣団は百姓町人より金銀米銭を借用したり、私用のための人馬を徴発してはならないなど、三五カ条の「家中法度」を定めたり、三富新田を開拓するなどして領民に慕われていたという⁽³⁾。学問の面では、天

和元年（一六八一）、綱吉の学問上の弟子になり、翌年の講書始め行事に「大学」を講じた⁽⁴⁾ほか、荻生徂徠・細井広沢らの儒者を召し抱えたり、中国古典の復刻本を刊行したりしている⁽⁵⁾。このような、吉保の事跡をみると、『土芥寇讎記』の吉保の評価は的外れなものではないようである。川越時代の行跡は「民ニ哀憐アリ」とする『土芥寇讎記』の記述と矛盾しない。また、『土芥寇讎記』では、吉保を文武之沙汰はないとしていたが、実際の吉保は文道の心得もあつたようである。吉保を明君とみるのは間違っていないといえる。

では、吉保に悪評が付きまとうのは、なぜであろうか。それは、やはり吉保の早い出世と大きな権力を持ったことによるものだろう。早い出世は周囲の嫉妬を買い、権力を持つと政敵も増える。実際、吉保の好色ぶりを手紙に書いた室鳩巢は吉保の政敵の側の人物だった⁽⁶⁾。悪評は、このように吉保に悪意をもつ人物によるものだろう。また、『折りたく柴の記』が享保元年（一七一六）に起筆され、『常話雑記』は宝永二年（一七〇五）から四年間の記録で必ずしも『土芥寇讎記』の時代の吉保の評判を記しているわけではない。『土芥寇讎記』の評価を考えると、その編者は吉保を正當に評価しており、少なくとも反吉保の側の人物ではないようである。編者の姿は元禄時代の政治状況や吉保に関する風聞を、さらに詳しく調べることで、よりはっきりとしてくるだろう。

注

(1) 大石慎三郎『元禄時代』（岩波新書、一九七〇年）。

(2) 『国史大辞典』

(3) 前掲注2参照。

(4) 『埼玉県史』

(5) 前掲注2参照。

(6) 前掲注1参照。